

受講番号 19034 学校名 伊野商業高等学校 氏名 福永 志織

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年5ホーム(少人数制) 生徒数 18名
科目名 英語 I 単位数(授業時数) 2 時間 使用教科書名 三省堂 VISTA English Series I New Edition

クラスの様子・特徴

1クラスを出席番号で分けた少人数のクラスである。活発で発言も多く、積極的であるが、中学での既習事項が定着しておらず、基礎的な語彙力に欠ける。英語に対する苦手意識を払拭し、基本的な英語力を定着させる必要性を感じる。

問題の確定

英語に対する苦手意識が高く、基礎的な文法事項、語彙力が十分でないため学習に対し受動的で自信がない。

予備調査

A 授業の観察

発問への反応は非常に積極的で基本的な事項については少しのヒントでスムーズに答えられるが、少し踏み込んだ内容や応用問題になると押し黙る生徒が多く、平易な語句での長文でも分量で理解しようとする姿勢を失ってしまうなど、自信のなさが見られる。

B 生徒による授業評価

入学時英語に対し苦手意識を持っている生徒が70%ほどを占めていたが、徐々に減ってきている。授業に対する評価はおおむね好意的であるが、「わかりやすい」授業ではあっても「英語ができる」という感覚にはつながっておらず、定着には至っていない。

C 学力データ

入学時の英語力調査では正答率が37.2%と圧倒的な語彙力のなさが浮き彫りとなっている。しかし、定期テストにおいては常に平均点が学年最高値であることから、毎時間の授業内容についてはある程度理解しているものと思われる。

リサーチ・クエスチョン

「英語が読めない」「単語が分からない」から英語が苦手と感じている生徒に対し、音読練習を重ねることで英文に対する苦手意識を払拭できるか

仮説・実践・検証

仮説1

⇒ 新出単語の発音を丁寧に練習すると、単語の発音が身につくだろう

実践1

⇒ 新出単語のフラッシュカードにカタカナでルビを振り、アクセントの位置やイメージを持たせる。その後、日本語を見て英語を発音できるようにする。発音の定着後、英語を聞いて意味が理解できるようにする。

検証1

品詞や意味確認後のフラッシュカードを用いた発音練習では、すんなりと受け入れられていた。カタカナが振ってあるため、間違いを恐れず発音でき、声もよく出ていた。また、アクセントを声や身体で表現して指導すると、面白がって真似る生徒が出てきた。発音について意識することで、音とスペル、意味の連動ができていたようだった。

仮説2

⇒ 文単位での音読練習の際に、区切りながら発音することで、文のまとまりを考えて読む力が身につくだろう。

実践2

⇒ 熟語に着目させ、まず熟語の意味を理解させる。その後、文をフレーズに区切って発音する。フレーズを徐々に長くしていき、リズムを意識させる。

検証2

単語の練習と違い、熟語は語と語の関連付けが行えず、なかなか頭に入らないような生徒も見られたが、音読活動には積極的に取り組めた。スラッシュをいれる活動はなぜここにスラッシュが入るのかということまで理解している生徒はほとんどいないようだったが、連音を意識したり、かたまりで発音しようとしたりする意欲は感じられた。

仮説3

⇒ 単・熟語を理解し、本文の内容を把握した上で再度音読を行うことで、文のまとまりやリズムを考えながら音読できるだろう。

実践3

⇒ 本文の意味を理解した後、再度意味を確認しながらフレーズリーディングを行い、文単位でまとめて読むことができるように練習する。その後、実践としてクラスで音読テストを実施する。

検証3

内容把握後の音読練習では、教員の日本語のあと、英語に翻訳する形で音読練習を行ったが、教員の日本語を聞かず、一文丸ごと読んでしまう生徒もあり、少し難易度が高かったように思う。しかし、どの生徒も懸命に答えようと積極的に取り組むことが出来ていた。同じような作業を、内容把握を行いながらも少しやっていたら、もっと楽しく取り組めたのかもしれない

研究の成果

ただ音読をしていく、というのではなく、どのように生徒に積極的に音読に取り組ませるか考えながら授業を組み立てることが非常に勉強になった。ただ淡々と語句を発音していくのではなく、授業者自身がエンターテナーとなり、生徒というゲストをいかに満足させられるかを考えながら指導するのは非常に難しいことであったが、生徒たちの元気や積極性に大いに助けられ、自分自身も楽しんで研究に取り組むことができた。また同時に、授業の中で意識的に生徒を「褒める」発言を多くしたことで、生徒たちにも「自分たちはできる」「期待に応えたい」という表情や発言が増えてきたことも印象的であった。

今後の授業改善の課題

音読で苦手意識の払拭というテーマについては、関連性を裏付けるデータは取れなかったが、生徒たちの音読活動に取り組む表情には顕著な違いがあらわれていた。しかし、正確な発音、リズムの習得という点では定着は十分とはいえず、カードにカタカナを書くという方法を取ったことが生徒の発音の意欲は高めたが英語の発音という点ではマイナスに出てしまったといえる。フォニックスの使用なども検討し、より良い授業作りに努めたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-892-0548

電子メール